

<<ワークショップ>> (9月13日15:45-18:15)

【F棟2F210教室】

ロールプレイ会話による方言談話対照研究の試み
—地域差・世代差・性差・メディア差に注目して—
井上文子 松田美香 酒井雅史 白坂千里

方言談話の地域差・世代差・性差・場面差を考察するためのパイロット調査として、各地の方言におけるロールプレイ会話を収集し、談話構造や談話展開についての枠組みや仮説を立てることをめざしている。調査は、「AがBに自分の代わりに会に参加してくれるよう頼む」「BがAを旅行に誘う」などの場面を設定し、電話をかけるという方法で、その状況での会話を親しい同性の友人同士で実演してもらった。おもに依頼場面と勧誘場面の会話データを共通の対象として、それぞれ異なった観点からの分析事例を具体的に紹介し、話題提供を行う。①首都圏における依頼談話・勧誘談話の分析事例：世代差を中心に異同を見る。②首都圏と大分談話の比較分析—地域差・世代差・性差—：談話構造・機能から導き出したストラテジーを中心とした異同を見る。③敬語運用の世代差・地域差・性差—丁寧語使用を中心に—：上下関係といった関係性によらない丁寧語使用「談話標識的使用」「立場に則った使用」に焦点をあてる。④談話と携帯メールの対照に関する分析事例：媒体による談話展開の異なりに注目する。フロア参加者にも実際の会話データを提示し、確認・分析してもらいながら、着眼点、分析対象項目、分析方法などについて討論する。また、より多くの地域・世代を対象とした共同調査を呼びかけ、参加者が共有できる会話データベースを連携して構築していくことを提案したい。

<<ワークショップ>> (9月13日 15:45-18:15)

【F棟 1F 109 教室】

災害時の医療・福祉現場における方言の問題と支援
—東日本大震災から学ぶ減災のための方言支援ツール—
今村かほる 岩城裕之 武田拓 日高貢一郎 友定賢治

未曾有の大災害となった東日本大震災では、その被災地域の広さ、被災者数の多さなどの事情から、全国各地から医療・福祉・行政などの支援が行われ、ボランティア活動も全国区で実施されている。そのため、被災地域の文化・方言と支援者の文化・方言との間で、いわゆる「文化摩擦」や「方言摩擦」が起こっている。

当該地域は、いわゆる「ズーズー弁」に代表されるような東北方言の地域が中心で、共通語とはかなり異なる特徴を有している。そのため支援者は、「まさか共通語が通じないとは思わなかった」とか、「いまどき方言がわからないなんてことがあるとは思わなかった」という経験をするようになった。

また、被災各地は明治以来の方言矯正、標準語化の影響を強く受けた地域で、方言コンプレックスと呼ばれる自方言への意識がみられ、さらに、コミュニケーションの特徴が西日本などとは異なることから生じた問題もある。

被災地で方言に関するどのような問題が起こったのか、医療・福祉関係者へのインタビューとアンケート調査の結果を基に明らかにする。さらに、今後、予想される大規模災害に備え、減災のために方言研究に必要とされているのか、開発中の「方言支援ツール」を社会インフラとするためにはどういう工夫が必要かなど、医療・看護・福祉・方言研究の立場から考える。

<<ワークショップ>> (9月13日15:45-18:15)

【F棟1F110教室】

インタラクションから見る日英語の構文選択

—認知言語学と社会言語学の交流を目指して—

野中大輔 貝森有祐 高橋杏紗 山田彬堯 井上逸兵

人間の言語の大きな特徴は、客観的には同じ内容に対して様々な表現手段を提供するという点である。表現のレパートリーが多ければ多いほど状況に合わせた言語使用が可能になるが、それは当該言語の巧みな話し手になる上で重要な要素の一つである。しかし、ここで疑問になるのは、競合する表現群のうち実際に選択されるのはどれか、ということである。本ワークショップでは(i)事態を構造化し節の形式を決める役割をもつ項構造構文と(ii)事態と事態の関係を述べる、つまり複数の節を結びつける複文構文に焦点を当て、日英語の構文選択のメカニズムを探ることを目指す。

特に注目するのは「参与者」である。ここで言う参与者は、描写される事態内の項とそのような事態が語られる談話の当事者の両方を指す。構文選択の問題に迫るにはこの二つの次元で見られる参与者の関係、つまり「インタラクション」の観点を取り込むことが不可欠であることを示す。事態内のインタラクションをどのように捉えるかという心的側面を重視してきた認知言語学的な構文研究を出発点に、言語使用から談話の参与者間のインタラクションを扱ってきた社会言語学や談話研究の知見を取り入れて構文選択の問題に取り組む。認知言語学と社会言語学の交流(インタラクション)はCroft(2009)の提唱するsocial cognitive linguisticsにおいても強く主張されていることであり、本ワークショップはその実践であると言える。